



第3回（2014年度）「日本医学ジャーナリスト協会賞」を発表

日本医学ジャーナリスト協会（水巻中正会長）は、一昨年、協会発足 25 周年を記念し、質の高い医学・医療ジャーナリズムを日本に根付かせるために「日本医学ジャーナリスト協会賞」を創設。第3回目となる今年度も、7月末までに全国から多数のご推薦をいただきました。

その中から、「オリジナリティー」「社会へのインパクト」「科学性」を選考基準に、協会内に設けた選考委員会で慎重に審議した結果、第3回の受賞者として、次の方々を選ばせていただきましたので、お知らせいたします。

第3回（2014年度）日本医学ジャーナリスト協会賞 受賞作品

＜大賞＞	書籍部門	大久保真紀さん 『献身—遺伝病 FAP(家族性アミロイドポリニューロパシー)患者と志多田正子たちのたたかい』(高文研)
	映像部門	日本放送協会 制作局 文化・福祉番組部 ディレクター 猪瀬美樹さん ETV 特集「僕は忘れない ～瀬戸内 ハンセン病療養所の島～」
＜特別賞＞	新聞部門 新潟日報社報道部 社会保障班	「知ろう認知症」をはじめとする「あんしんネット」認知症シリーズ
	書籍部門 村上紀美子さん	『納得の老後 日欧在宅ケア探訪』(岩波書店)

なお、協会賞の発表・授賞式および記念シンポジウムを、10月27日（月）、午後6時30分より、東京・内幸町の日本記者クラブ（日本プレスセンター9階宴会場）で開催します。ご取材いただくと幸いです。別紙の出欠票にてご都合をお知らせください。

— この件に関するお問い合わせ先 —

NPO 日本医学ジャーナリスト協会 事務局 担当：古阪

Tel.03-5561-2911 Fax.03-5561-2912

受賞理由は以下の通りです

<p><大賞></p>	<p>大久保真紀さん</p> <p>書籍部門</p> <p>『献身—遺伝病 FAP(家族性アミロイドポリニューロパシー)患者と志多田正子たちのたたかい』</p>
<p>この本で扱われているのは遺伝性の難病であるが、現代の社会が抱える医療のあり方、差別や偏見、患者として病気にどう向き合うのか、など多くのことを考えさせる優れたノンフィクションである。</p> <p>家族性アミロイドポリニューロパシー(FAP)は、下痢を繰り返し痩せて行き、10～15年で亡くなる。2分の1の確率で遺伝する病気であることから、患者や家族は差別や偏見に苦しんでいる。その患者と家族に寄り添い献身的に支える一人の女性に著者が出会ったのが13年前。取材許可が出るまで1年、それから4年取材を続け新聞記事にした。さらに取材を重ね、この本になった。最近では進行を抑えるための肝移植が行われているが、この移植医療が患者や家族に新たな葛藤を生んでいる。患者数が少なく販売部数が見込めないため出版社が見つからず自費出版となったが、出版元の「歴史に残すべき」との判断から、インターネットでも入手できるようになり、反響が広がった。このジャーナリスト魂、出版社魂も評価された。</p>	
<p>映像部門</p>	<p>日本放送協会 制作局 文化・福祉番組部 ディレクター 猪瀬美樹さん</p> <p>ETV 特集「僕は忘れない ～瀬戸内 ハンセン病療養所の島～」</p>
<p>ハンセン病を忌み嫌い、徹底隔離した日本独特の過ちは、いま、忘れられつつある。18歳の大学生の目を通してハンセン病の歴史を鮮やかに浮かび上がらせたこの作品が放送された意義は大きい。舞台は、香川県の離島、大島の 国立療養所大島青松園。日本の誤った国策が知られるようになり、島を見学する人たちが増えたとき、母の仕事の関係でこの島で過ごした少年は、「大島案内」のボランティアに加わった。当時、小学校3年生だった。大学合格後、彼は再び大島に戻ってくる。訪ねた先は、たとえば、若いときに収容され、故郷に戻れないまま80歳になった山本さん。島の土を使い骨壺を作っている。島の納骨堂に並んだ2000余りの骨壺の列に、手作りの自分の骨壺を置く日のために。戦前から戦後の昭和20代末まで、患者は亡くなると病理解剖され、必要な臓器が切り取られた。遺体は、まだ生きている元患者たちによって清められ、火葬され遺骨になった。学生を案内役として悲しい歴史を語り継ぐという構成力も高く評価された。</p>	

<p><優秀賞></p>	<p>新聞部門 新潟日報社 報道部社会保障班 「知ろう認知症」をはじめとする「あんしんネット」認知症シリーズ</p>
	<p>認知症をめぐる報道が多彩を極めるなか、地方紙の特色を活かして、現場に密着した目線から淡々と迫った長編企画である。2013年9月に「知ろう認知症」のタイトルでスタートし、「支え合いへの一歩」「若年性認知症と歩む」「どう防ぐ どう守る」と、あくまでも読者と共に考える姿勢を貫いている。東日本大震災3年では、新潟県に避難してきた人と認知症の問題を取り上げ、新潟大脳研究所や長岡技術科学大の家族性アルツハイマー病、軽度認知障害の評価方法を紹介する一方で、認知症の人の暮らしを支える介護職員の育成の重要性を訴える。</p> <p>幅広い視点と取材の立ち位置が評価された。</p>
	<p>書籍部門 村上紀美子さん 『納得の老後 日欧在宅ケア探訪』</p>
	<p>未来に灯りをともすような一冊である。老いの日々とのつき合い方を探す取材の旅を重ねて40年近く。在宅ケアの現場を訪れる旅は、ドイツ在住の3年間を含め欧州7カ国、21都市にまで及んだ。書籍や研究報告、論文や調査資料による客観的、俯瞰的、制度的な知見だけでなく、リアルな現場の姿に数多く触れることを重視。ケアやサービスを肌で感じる努力を重ねてまとめた労作である。超高齢社会にあって、人々が少なからず覚える近未来の不安に対する指針や“知恵”が各所に汲みとれる。</p> <p>ひとり暮らしでも、ひとりぼっちではない。より居心地のよい老いの日々に向けた指南書といえ、評価された。</p>